

意見（異見）を控えてしまう私たち

私は一ヶ月に一度、イタリア人の修道士が指導してくださる『神曲』を読む会に通っております。新入りなので他のメンバー7, 8人と親しくなりたいくて、「私は～～ですが、お名前を教えてくださいませんか？」と会が始まる前に声をかけてみました。先生はこれは良い機会だと思われたのか、みんなに自己紹介をさせました。先生も話しました。

「僕は34年前に日本に来ました。修道会では誰も日本に行きたがらなかったのですが……。『言葉が難しい。それに日本人は何を考えているのかさっぱりわからない』とみんな逃げ腰でした」

この「何を考えているかわからない日本人」という指摘は、残念ながらあたっているなあ、と思ってしまいました。私たちは、おしゃべりをしてもし辺雑記の叙述ばかりで、意見を言うのを避けている、つまり言わない方が無難だという姿勢をずっと通してきたように思います。異見であればなおさら口に出さない方が身のためと思って、ますます無口になってしまいます。このような雰囲気の中で暮らすと、意見形成もしなくなり、意見を持っているが黙っているというよりは、何も意見のない生き方になってしまうと思われます。世の動きに無関心になり、虚無的にもなってしまいます。「民主主義の敵は無関心である」とどこかで読みましたが……。

9月18日の『日本経済新聞』の文化欄に、富山県の魚津市で1918年に45人ほどの「浜のおかか(お母さん)」が米の値上がりに反発して立ち上がったことが紹介されていました。その年の初めには一升30銭ほどで買えた米が夏ごろに45銭まで高騰したそうです。米騒動の発端として知られるこの動きは、実は「家庭の窮乏に耐えかねたおかかたちの小規模な哀願だった」のに「地元ではお上にたてついた蛮行として、語る事がタブー視されていた」と書かれていました。お上のやり方はおかしいとして立ち上がったのではない、という解釈で、庶民がお上の政策を批判するなどおこがましいという前提の文章でした。まだ江戸時代の感覚です。この「おかか」たちが当時の政府を批判して立ち上がったのであれば、私は心から尊敬したいのですが……。「Morgen 明日」というドイツ映画では、市民レベルで原発廃止、自然エネルギーへの転換を実現した市民たちが紹介されていました。「個人が自分で意見を持つこと、および行動することが大事」という言葉が心に残りました。

『神曲』を読む会では、自分と同時代の人間を最高権力者でも、ばっさばっさと地獄に送り込んだダンテの批判精神に触れながらも、私は意見を忌憚なく言えるレベルになっておりません。おそろおそろ発言しています。意見を控えるという呪縛から解き放たれて何でも言えるようになりたいです。

(2018年9月27日 律)